

論文の要旨

論文題目 ゴンクール兄弟の十八世紀崇拜と近代性
氏名 太田 康子
学位 博士（文学）
授与年月日 平成 19 年 3 月 23 日

本論文では、フランス十九世紀後半に活躍した写実主義作家ゴンクール兄弟、兄エドモンと弟ジュールの十八世紀賛美と彼らの近代主義的審美観を分析し、その関わりを考察する。

物質的に進歩、繁栄した十九世紀の市民社会に背を向け、文学と芸術のみに没頭するゴンクール兄弟にとって、フランスの十八世紀、とりわけルイ十五世の治世であるロココ様式の文化の時代は理想郷であった。しかし、この時代の文化は一般的には、フランス革命以前の「墮落した貴族文化」という評価を受けていたため、彼らはこの汚名を晴らすため、十八世紀再評価に専心した。

また、彼らはブルジョワジーの身分に属しながら、凡庸なブルジョワジーを嫌悪し、批判する「芸術家 (artiste)」の立場をとった。そして彼らが芸術家として有する近代主義者的特性である「革新的芸術観」、「神経症」、「女嫌い」は彼らの十八世紀賛美に反映され、独特な審美観を構築した。彼らの審美観が創作活動に与えた影響を分析し、「十八世紀再評価の先駆者」としての彼らの功績を論じていく。

第一章では、1800- 1860 年のロココ文化再評価の状況を論じる。ゴンクール兄弟が十八世紀再評価として初めて執筆した論文「ワトーの哲学」が掲載されたのは 1856 年 9 月である。だが革命以降、新古典主義が隆盛であったにもかかわらず、ロココ様式は実際、絵画やモード、装飾等の分野で、ゴシック様式と共に生き長らえていた。1830 年代にはロマン主義作家のサークルを中心に「ワトー崇拜」が起こった。ネルヴァル、ウーセイ、ゴーチエからボードレル、ヴェルレーヌにおいて、優美で貴族的なロココ絵画は文学の発想の源となった。ゴンクール兄弟はブルジョワジーとの差異化を図るため、「ダンディズム」という新しい貴族のスタイルを実践した。精神面では「芸術のための芸術」といわれる耽美主義を採用し、高踏派の詩人たちにも影響を与えた。彼らにとって十八世紀文化こそ貴族の感性とエリートの誇りを維持できるものであった。

第二章では、ゴンクール兄弟の芸術家としての過程と信条を論じる。彼らは十八世紀への興味から十八世紀の歴史に関する文献を多く残している。当時の身近な資料を収集

して構成する彼らの歴史研究の方法は、小説の制作にも採用された。

またゴンクール兄弟は十八世紀美術（デッサンや家具など）と日本美術（浮世絵や工芸品）の収集家として有名である。彼らの日本美術への興味は十八世紀の貴族の異国趣味に影響されたものである。彼らは、芸術だけを信じて生きる十九世紀の芸術家も十八世紀の貴族のように文化を担う存在であるべきだと考えた。そのため彼らは独自の「芸術的文体」を駆使して共同で作家活動を行った。彼らはたとえこの技巧的な文体が大衆に支持されなくてもあくまでも芸術家としての意思を貫いた。

第三章では、ゴンクール兄弟の近代主義的芸術観を論じる。近代主義的芸術観は革命以降に古典主義への反発から生まれた。彼らは、十八世紀の画家たちの革新的創意の研究を通じて古典主義や伝統を排除し、近代の自由な想像力による芸術の創造を試みた。彼らの『十八世紀の美術』（1859-1875）ではモノグラフの形式を採り、画家たちの革新的創意を論じた。当時の貴族たちの風俗を描いた「雅宴画」を確立したワトーはその中で新しい優美さを表現した。ワトーは愛や憂鬱など人間の感情を表現し、「詩人画家」と形容された。ブーシェは「時代の趣味の代表」であり、主に健康的な官能性と優美さにあふれた女性を生き生きと描いた。同様に「詩人画家」フラゴナールは「自由な語り手」と形容され、迅速で大胆なタッチで官能的な女性を描いた。シャルダンの静物画は忠実にものの概観を写しながらその隠れた生命をとらえた。グルーズはロココ美術の感性を引き継ぎながら道徳を説く画家といわれた。

「近代性」を賞賛する兄弟も現実に関心を持ち、そこから「美」を選択し、作品に描いた。彼らは初めて小説に自ら嫌悪する「庶民」を登場させた。彼らは常に外界の事物の印象に感性を研ぎ澄まし、その瞬間の印象を集め、作品に並べることに専心した。この技法は文学の「印象主義」と呼ばれる。実際、彼らの作品には印象派絵画を思い起こさせるような風景描写や技法が用いられている。

また彼らの審美観の特性は、写実主義と観念主義とが共存していることである。彼らは十八世紀の絵画や日本の浮世絵に描かれた人間の内なる「生」または「魂」を追求し、それらの表現を試みた。とりわけ十九世紀末は、科学万能主義や文学の自然主義は衰退し、象徴主義、神秘主義などが誕生するが、エドモンも時代の流れに沿って、作品に詩情や幻想などの採用を試みた。

第四章では、ゴンクール兄弟の女性観を論じる。彼らは同時代の女性を嫌悪し、十八世紀貴族の知的で優雅な女性を称えるという女性観を有していた。彼らは『十八世紀の女性』（1862）によって、「軽薄で不実」という偏見から彼女たちを解放しようと欲した。

兄弟はこの作品に理想の女性像を構築した。彼らは、十八世紀の貴婦人が、誕生時から「人工的」に優美さ、官能性、知性などを形成される過程を叙述して、理想の美は芸

術家と同様に絶え間ない努力によって獲得されるものであることを示唆する。

また彼らは、十八世紀の芸術家たちが貴婦人たちに優遇された環境を描いた。当時、上流の貴婦人たちはサロンを持ち才能ある芸術家を世に送り出したのである。また十八世紀を女性上位の時代と見なし、とりわけポンパドゥール公爵夫人を「歴史を動かした女性」として注目した。彼らはこのような知的で権力を持つ貴婦人による庇護とは対照的な十九世紀のブルジョワジー社会の彼らへの冷遇と疎外を嘆いた。

さらに彼らは貴婦人たちがその地位を保持するために必要な本能や知性を論じる。彼らによれば、貴婦人たちには社交界において交際相手の精神の観察と分析を徹底的に追求しなければならない知性が必要とされる。彼女たちは、彼らと懐疑主義、無神論の姿勢を共有し、精神的に一体化した存在であった。この実体のない「詩的存在」としての女性像は、兄弟にとって、現実の女性のように芸術家の才能を脅かすことなく、創作のインスピレーションを与えてくれる存在でもあった。

彼らの現実の女性への嫌悪は、十九世紀の男性優位の傾向でもあった。彼らは女性を嫌悪しているにもかかわらず、多くの小説で同時代の女性の悲劇的な生涯を描いた。この嫌悪はまた現実をより客観的に描く彼らの写実主義文学の創作活動には不可欠の視線でもあった。彼らは歴史研究をするのと同様に、綿密な観察と記録および客観的資料に基づき、細部の現実を再現することに努めた。そして、凝った「芸術的文体」を駆使して登場人物の精神状態を描写し、そこに作品の真実があると考えたのである。

第五章では、ゴンクール兄弟の審美的生活と神経症について論じる。彼らの特性として自ら認める先天的な「神経症」的傾向が挙げられる。彼らにとって、「神経」と当時流行した「生理学」への興味は、創作活動や審美観にとって重要な要素である。

彼らの小説には、同時代の小説と同様に、多くの神経症患者が登場するが、これは彼らの病への関心を示している。彼らは「貴族の印」、または「芸術家の印」として「神経症」を意識的に欲した。彼らにとって神経症はまた「独創性の印」でもあり、彼らの文学に繊細さを与えた。また事物を観察し、再現する写実主義作家は病気が「見る」能力を高めると信じた。芸術品を観ることで目の喜びを得る彼らはとりわけ「色彩」とその調和にこだわった。ロココ美術に共通するこの色彩への嗜好は、線を重視する古典主義と対極をなすものである。彼らのこの視神経に関わる審美観は、しばしば「表面的」、あるいは「過度に精緻」と批判されるが、色彩の言葉をちりばめた彼らの表層的美学こそ、ロココ様式の時代や十九世紀末の退廃の時代が求めたものであった。

十九世紀末、「芸術家」ゴンクール兄弟は「耽美主義者」に進化した。エドモンは十八世紀のブドウールのような、異国趣味の美術品に囲まれた理想の空間で生きる喜びを享受した。芸術品から「詩的感性」を得られる理想の場こそ彼らの芸術創造の源泉であった。また兄弟にとって洗練された工芸品は十八世紀の貴婦人の代替物であり、女性を

「物」とみなし、それに執着する態度を示した。同時に近代主義者の彼らは、現実の Париを愛し、そこから芸術創造の靈感を得た。

新たな文学の創造のために過去の文化を採用し、時代の文化の創造に貢献しようとした兄弟の審美観には幾つかの矛盾する傾向が認められる。選良主義者の彼らが芸術の民主化（絵画の主題、工芸品の評価）を支持したことである。また、ヒステリーを生じる同時代の女性を嫌悪する一方、彼らは自ら患う精神の病こそ芸術家の証であり、創作の源泉であると考えた。さらに、十九世紀に小ブルジョワジーから貴族になろうとする生涯続いた兄弟の努力は、十八世紀の優雅で無為に過ごす貴族とは相反するものである。晩年、エドモンは新しい科学技術や文化を嫌い、ブルジョワと同様に社会の変動を嫌う保守的態度を示した。

だが、このような矛盾にもかかわらず、彼らの独特の美学は、ゾラの自然主義やプルーストの文体、「印象派」絵画の成立に貢献した。さらに耽美主義者としての生活スタイルや作品は、デカダン派の作家たちに影響を与え、また工芸品への愛着は、ガレ等の工芸品再評価の運動に貢献し、次世代の文化の形成に大きく関わった。

ゴンクールは芸術家として、芸術、文化の伝統だけでなく、人々の拝金主義や文学の商業化にも抵抗した。また目まぐるしく変化する近代社会の流れに応じて絶え間なく創作活動を続けた彼らは、様々な文化の先駆者であり続けた。以上のようにロココの遺産によって新たな美学を打ち立て、芸術家としての信念を貫いた彼らこそ真の十八世紀再評価の先駆者であり、十九世紀の芸術家といえよう。